

教宣 せぶん

健保 箱根寮

東京海上日動の健康保険組合が運営する箱根寮をご存知でしょうか。旧日動健保を引き継ぐ形となったこの箱根寮は、緑豊かな山中にあり、湯量豊富な温泉と合わせ、心の洗濯をするにはもってこいの施設です。大涌谷の源泉を直接引き込んだ温泉は、ひところ報じられ話題となった商業主義に走る温泉宿と違い、混じり気や不純物はまったくなく、まさしく「本物」です。利用料も安価ですし、健康保険組合の管理・運営なので、どこかの施設と違い、所属する労働組合によって差別されることもないので安心して利用できます。

そんな箱根寮にも、東海社の、経済合理主義の「魔の手」が伸びてきました。管理・運営にコストがかかる、また何かあった時の責任問題などの観点から、すべてを「アウトソーシング（外部委託）」にするという考え方です。いままでの箱根寮を実際に運営してきた人たちの慣習やしきたりは一切無視し、新しい手法で運営するというものです。30年弱の長きにわたり、箱根寮の運営に携わってきた管理人さんも、そんな東海社の手法についていけず、9月にその職を辞すことを決めたそうです。こんなところにも日動の「文化」を排除しようとする東海社のえげつなさが見て取れます。

田舎に、人々の心を癒す雄大な森がありました。新鮮な酸素を供給してくれるその森には、人間だけではなく、たくさんの動物や植物がくらしていました。経済合理性を最優先に掲げる人々には、この森が何の金銭的な価値を生んでいないことに不満を持ちます。「あの森を壊してリゾート施設を作ったら儲かるだろう」という発想になります。その森が「金銭」というものさし以外にどれだけの価値があるのか、まったく気がつきません。

いま東海経営がやろうとしていることは、片方で経済合理主義の名のもと、雄大な森を壊し、そこに一大リゾート施設を建設しようとしています。片方では外国に行って植林していることを盛んに宣伝しています。この矛盾に気がついている者は思います。「経済合理主義が決して時代の流れではない」ということを。